



哲学者の  
密室  
笠井 潔 Katsuhiko  
Kajiwara

光文社

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―十二―十三

(〒112-111)

光文社 出版局

哲学者の密室

一九九二年八月三十一日 初版一刷発行  
一九九二年九月二〇日 二刷発行

著者 笠井 潔

発行者 大坪 昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―十二―十三  
電話 東京〇三三九四二―三三四一(代)  
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 大日本印刷

製本所 大日本印刷

定価三、二〇〇円  
(本体三、〇七円)

哲学者の  
密室

笠井 潔

kasai  
kiyoshi

前  
篇

# ハートウンゲの魔剣

43

# 悲鳴

中  
篇

283

- 第一章——夜の急報
- 第二章——雨の密室
- 第三章——夢魔の塔
- 第四章——死の哲学

211 158 107 45

- 第五章——地獄の門
- 第六章——鬼の履歴
- 第七章——血の饗宴
- 第八章——雪の密室

383 352 311 285

# ワルキューレの悲鳴

後  
篇

# ジークフリートの死

第九章——存在の夜

431

第十章——廃屋の女

522

第十一章——死の墜落

588

第十二章——逆の密室

631

終章——鋼鉄の葉

684

登場人物

フランソワ・ダツソー

パリのユダヤ人資産家

エミール・ダツソー

フランソワの父

アンリ・ジャコブ

医者 エミールの旧友

エドガール・カツサン

自動車修理工場の経営者 エミールの旧友

ダニエル・デュボワ

ラビ エミールの旧友

クロディーヌ・デュボワ

ダニエルの娘

モーリス・ダランベール

ダツソー邸の執事

フランツ・グレ(グレゲローヴァ)

ダツソー邸の下男

モニカ・ダルティ

ダツソー邸の料理女

ルイス・ロンカル

ポリアリア人の旅行者

イザベル・ロンカル

ルイスの妻

ツァイテル・カハン

イスラエル大使館員

ダニエル・コーヘン

イスラエル国籍の男

エマニュエル・ガドナス

パリ大学哲学教授

ジャン・コンスタン

ポルト・デ・リラ事件の被害者

ギヨーム・ピレリ

ガソリンスタンド店員

マルティン・ハルバッハ

「二十世紀最大」のドイツ人哲学者

バウル・シュミット

ドイツ人退職刑事 元武装親衛隊軍曹

☆

ハインリヒ・ヴェルナー

武装親衛隊少佐

ヘルマン・フーデンベルグ

コフカ収容所所長

レギーネ・フーデンベルグ

ヘルマンの妻

ハンス・ハスラー

コフカ配属の武装親衛隊中尉

フェドレンコ

コフカ配属のウクライナ傭兵

イリヤ・モルチャノフ

ウクライナ傭兵の隊長

ハンナ・グーテンベルガー

コフカ収容所の女囚

☆

ルネ・モガール

パリ警視庁警視

ナディア・モガール

ルネの娘

ジャン・ポール・バルベス

パリ警視庁警部

マチウ・デュラン

警察医

マゾン

パリ警視庁警視 モガールの同僚

ポーヌ

パリ警視庁刑事

マラスト

パリ警視庁刑事

ダルテス

パリ警視庁刑事

矢吹 駆(ヤブキカケル)

謎の日本青年

ニコライ・イリイチ

謎のロシア人 矢吹の宿敵



装丁／菊地信義  
装画／ダビデ・ピッチゴーニ  
本文イラストレーション／宇野亜喜良

虚無なる『虚無への供物』の作者へ

龍の傷口から熱い血潮が流れ出し、

天晴れな勇士がそれを体に浴びた際、

両方の肩の間に一枚の広い菩提樹の葉がおちてきました。

この場所こそあの人の急所なのです。これが私の心配の種なのです。

「ニーベルンゲンの歌」より

## 序章 追想の魔

### 1

小学校が終業になる時刻だった。半ズボン姿の子供が三、四人、ランドセルを鳴らしながら歓声をあげて、噴水広場の石畳を駆けぬけていく。子供の叫び声と足音に驚いた鳩の群が、ばたばたと羽音をたてながら空中に舞い散った。

眼にしみる芝生の緑と、ぬけるような青空。あたりを透明に満たした明るい陽光と、頬をなぶる心地よい微風。円形や方形に造られたリユクサンブル公園の大小の花壇には、春の花々が赤や黄や薄紫色に、あざやかな色彩で咲きみだれている。そして前方に聳える、翼をひろげた白鳥のように優雅なバロック様式の宮殿建築。

もの心ついた頃から愛してきた、非のうちどころのない

美しい五月のバリだった。それなのに、なぜか眼に映る光景はよそよそしく、造りものめいて抽象的に感じられてしまう。絵葉書の写真を見せられているようで、美しい光景は官能的な現実感を欠いていた。ベンチで読んでいた本を脇におき、わたしはそつと唇を噛んだ。

わかっている。素直に新緑の季節を楽しめないのは、脳裏に焼きついて消えることのない、友人の死をめぐる衝撃的な出来事のせいなのだ。友人……。いや、かれは友人以上だった。ちょうど一年前の今日、アントワーヌはマドリッドで警官隊に射殺された。

オ・ル・ジョリ・モワ・ドゥ・メ・ア・バリ  
バリでもつとも美しい月、五月。

そうだ。昔、そんな歌があった。その歌が街角に流れていた頃、わたしはリセ初級の生徒で、まだほんの子供だった。

モンマルトルにあるリセの教室にも、五月十日のバリ

ケードの夜の衝撃はおよんだのだ。前の週からパリ五区の大学街では、大規模な学生デモが連日のように続いていた。しかし、あの夜の事件は、たんなるデモの域を超えていた。それは、フランス全土を揺るがせた五月革命のはじまりを告げたのだ。上級のクラスには、大学生にまじって警官隊と衝突し、怪我をしたり逮捕されたりした生徒もいた。

パリケードの夜の翌朝、テレヴィには、切りたおされた街路樹や炎上する自動車、カルチエ・ラタンの路地に築かれた無数のバリケード、火焰壕と棍棒が乱舞する市街戦さながらの光景が、次々に映しだされた。まるで、読んだばかりの『レ・ミゼラブル』に描かれている、サン・ドニ通りの叙事詩ではないだろうか。

わたしはテレヴィ画面に熱中していた。学生に投石されている、威圧的なヘルメットに黒光りする革コートの警官は国家警察の機動隊で、パパが勤務している司法警察とは直接の関係がない組織だから、警官の娘でも遠慮なしに興奮できる。

学級のみんなも、朝のテレヴィ・ニュースを見たのだろう。リセの教室は、百年ぶりにパリ市内に出現した街頭バリケードの話題で沸騰していた。前夜のバリケードがはじまりにすぎないとしたら、歴史の授業で教えられ

たパリ・コミューン以来の、一世紀に一度あるかないかの大事件にまで発展するかもしれない。そう、「市民よ、バリケードへ」だ。

なんとという幸運だろうか。わたしは、躍りあがりたい気持をおさえきれなかった。自分の眼で、歴史的な瞬間を目撃できるかもしれないのだ。その貴重なチャンスをも、むぎむぎと見送ることなど、絶対にできることはない。

翌日、わたしは学生に占拠されているカルチエ・ラタンを見物するため、学校を休んで、モンマルトルの中腹にある地下鉄駅をめぐらした。しかし、ラマルク・コーレンクール駅の横にある石の階段に坐って、一時間も待ったのに、同級生のミッシェルは最後まで待ちあわせの場所に姿を見せなかった。

あんなに約束したのに、優等生のミッシェルは直前になって、臆病風に吹かれたに違いない。ずる休みが露顕して、学校の先生や両親に叱られるのが怖いのだろう。なんてだらしなやつ。そんな男の子をボーイフレンドとして、冒険の相棒に選んだ自分に腹をたてながら、わたしは靴音をならしてメトロの階段を駆けおりた。あんな臆病者とは絶交だ、もうデートなんかしてあげるものか。

先生もパパも、わたしの冒険計画は知らない。学校に

は風邪で休むと電話しておいたし、ババは先週から、警視庁のオフィスに泊まり込みも同然だった。街頭の混乱に比例して、政治とは無関係な凶悪犯罪も激増しているらしい。

ババは優秀な捜査官だが、それでも一人娘が革命見物のため、学校をずる休みしたことまでは摺めないだろう。わたしに夕食を用意してくれる、通いの家政婦フランソワーズにさえ気づかれなければ、それで計画は完璧なのだ。

素晴らしい天気だった。催涙ガスの臭気が染みついたサン・ミッシェル通りやオデオン裏の路地を、わたしは浮きたつような足どりで歩いた。

街のいたるところに陽気な無秩序がひろがり、あたりの光景は壮大な工事現場を思わせる。表通りのパリケードは撤去されていたが、やけ焦げた自動車や切りたおされた街路樹が、路肩に無造作に積みあげられていた。街路には大小の石ころが散乱し、舗道の石畳が剥がされて、下に敷かれた砂が露出している。ふいに出現した都会の砂浜には、真夏の海水浴場のように無数の足跡が残されていた。

通りの様子が、いつもとは違っていた。繁華街なのに、シャッターを下ろしている商店が多い。靴店のバリーも

文具店のジベール・ジュンヌも店を閉じていた。扉も建物の壁も、政治的な落書きで一杯だった。しかし、それだけではないような気がする。人々の表情に、まるで仮面をぬいだような生気があるのだ。

街頭芸を見物する群衆の人垣の代わりに、路上には、多数の討論の輪ができていた。学生や市民が大声でなにか議論をしている。学生のジーンズや、カーキ色のブルゾンや埃まみれのジャケットの海のなかに、サン・ミッシェルやオデオンやリュクサンブル界隈の住人らしい清潔な服を着た若い女、中年紳士、犬をつれたベレー帽の老人などの姿も見える。わたしと同年代の、アンリ四世校のリセ生徒も。

赤や黒の旗がひるがえるソルボンヌ広場には、ピラを配ったり、政治新聞を売ったりしている学生が幾人もいた。モンテーニュの銅像の下では集会在ひらかれていて、リーダーらしいゲバラ髭の青年がスピーカーで演説している。集会を見物にきたらしい青服の労働者が、面識のない他人を掴まえては、熱心に議論を吹きかけている。それが、少しも不自然には感じられないのだ。

バリードの夜を通過したカルチエ・ラタンには、他人が他人ではないような解放的な雰囲気満ちていた。夏の革命祭フェスティバルよりも、はるかに真実味のあるお祭り。だ

れもが、心地よい興奮のなかで陶然としていた。そして、熱気の底にながれる若々しい緊張感。犠牲祭の生贄が流すだろろう血の予感と、張りつめた闘争の意志。

わたしは、硬貨に刻まれている〈友愛〉<sup>フランドル</sup>という言葉の意味を、そのときはじめて皮膚で感じたように思う。それは、スペイン革命を体験した高名な作家の言葉によれば、つまり「黙示録的な共生感」なのだ。

まだ、ほんの子供だったわたしは、もちろん五月革命を当事者として体験したわけではない。たんに好奇心の旺盛な女の子として、革命の現場を、おもしろ半分に覗いてみたにすぎない。それでも〈友愛〉の充溢する魔術的な異世界にふれた思い出は、どこか心の深みに刻まれて、わたしの考え方や感じ方に少なからぬ影響をおよぼしてきたような気がする。

読みさしの本は、ベンチの上で開かれたままで。その頁が、風でめくられている。最近、フランスで出版されたばかりの『収容所群島』。友人の医学生に勧められて読みはじめたロシア作家の書物もまた、アントワーヌの死について考えることを強いた。

あの年の五月、わたしよりも二つ年上で、政治的にも早熟だったアントワーヌは親友のジルベールと、バス・

ピレネーにある地方都市のリセでストライキ委員会を指導し、市庁舎を占拠する陰謀計画に熱中していたのだという。

アントワーヌやわたしが大学に入ったころ、もう学生運動は消滅寸前だった。ときおりソルボンヌ広場や、大学構内の礼拝堂前で政治集会をひらいている学生は、せいぜいのところ三、四十名で、はたから見ても惨めなほどに孤立していた。そして、その政治的な小グループのなかにアントワーヌの姿もあつたのだが、かれは大衆的な政治運動の可能性に絶望して、自滅的なテロリズムの道を歩んだのだろうか。

わたしもかいま見たことのある、〈友愛〉と黙示録的な共生感にあふれた地上の奇跡が、そのものとして、汚辱と腐敗した暴力に支配された怖しい地獄に変貌してしまう。そうならざるをえないのだと、作家は膨大な事例の山や、反論をゆるさない説得的な論理で、読者に執拗に語りかけていた。

天国を地上にもたらした聖なる祝祭は、それを徹底することで逆説的にも、おぞましい地獄に変貌してしまう。ルカ福音書の天使は、雷光のように地獄に墮ちた。それと、おなじことなのかもしれない。

読書界の話題の中心になっている『収容所群島』は、

左翼でも共産主義者でもないわたしにさえ、無視してやりすごすことのできない、精神的な衝撃をもたらした気がする。

語られた言葉の真実性を疑うことができないのだとしたら、子供のわたしが一瞬でも体験した、「パリでもっとも美しい月、五月」の素晴らしい思い出は、どうなつてしまうのだろう。人間性の悪の洪水を押しとどめるために、人は、あの輝かしい〈友愛〉の世界を断念し、それに感動する魂までを否定しなければならぬのだろうか。

ロシアではバリケードの祝祭は、肅清と虐殺と収容所群島の囚人の大群に帰結した。あの五月が、そうした悲惨な運命をまねがれたのは、革命が途中で挫折したからだろうか。ようするに、行くところまで行かないですんだからなのか。結果として、革命が収容所に、解放が虐殺に転化する呪わしい必然性は、革命の記憶を忘れられない少数の青年の魂に凝縮されたのかもしれない。

アントワーヌは少年時代の祝祭の記憶に憑かれ、それを無理にも追体験しようとして秘密結社へ「赤い死」のメンバーに志願し、テロリズムの沼地に踏みこんでいった。しかし、かれはなぜ、あんなふうに自分を、死の極点にむけて追いつめたりしたのだろうか。

〈赤い死〉の犯罪の真相を暴いた矢吹<sup>ヤブキカケル</sup>駆だが、かれは、アントワーヌやジルベールを警察に密告するような青年ではない。それなのに、なぜアントワーヌは危険な隣国スペインに潜入し、あんなふうに自殺同然の死に方をしたのか。

その疑問が、わたしを悩ませていた。謎の中心にあるのは、死だった。さまざまの死がある。事故死や病死など、ありふれた日常的な死。バリケードの英雄的な死、大量廃棄物さながらの収容所の囚人の死。そして、自罰的なテロリストの死さえもある。しかし、アントワーヌの死は、ほんとうに自罰だったのだろうか。

それら多様きわまりない無数の死のあいだに、どんな関係がありうるのだろうか。そして、いつかは到来する自分の死について、どんなふうに考えればよいのか。アントワーヌの死は、わたしに解答のない自問をもたらしたような気がする。

そろそろ時間だった。我慢できない気分では本を閉じ、あたりを眺めわたしてみよう。公園の新緑のあなたに、パステオンの白い田舎根が小さく見えた。その方向から、幅広の石段を噴水広場におりてくる人影がある。腕時計を見ると、ぴったり待ちあわせの時刻だった。



その人影が、わたしの注意を捉えつくした。ジーンズに、黒い革ブルゾン。しなやかな体つきの東洋人が、正確な歩調で石畳を歩いてくる。ゆるくウェーブした、肩まである漆黒の髪。メタル・フレームのサングラス。

もう、その顔までが見わけられる。全身に不思議な安堵感がみち、臉の裏に熱いものを感じた。駆けやりたい気持を必死で押さえつけ、わたしはベンチで、近づいてくる青年の姿を凝視していた。二度と会えないかもしれないと心配していたカケルが、もう、すぐそこにいるのだ。しかし、胸一杯にふくれあがるものは素直な喜びではなしに、なにか複雑な騷りのある、なじみのない感情だった。

三カ月ぶりに見る矢吹駆の端正な顔は、どこで灼いたものか、五月にしては目だつほどに浅黒かった。夏のヴァカンスあけの季節でなければ、パリの街角で、これほどに日焼けした顔を見ることはまれだろう。そして以前よりも、かなりやせたようだ。

顔からも、眼につくほど肉がおちている。頬から顎にかけて印象的だった、あの力強い官能的な曲線が、いまは少年のように繊細な、透明なものに感じられた。大病でもして、ようやく回復したところではないだろうか。わたしは、少し心配になった。

ベンチの前で、カケルは無表情にわたしの顔を覗きこんだ。「やあ」とつぶやいて、そのまま隣に腰をおろす。まるで昨日別れて、また今日も顔を合わせたという感じの、あまりにそつ気ない態度だった。

「しばらくね。どこに行つてたの。そんなにやせて、病気でもしたんじゃないの」

緊張で、声が掠れている。カケルはわたしの顔をちらりと見て、無言で肩をすくめた。予想どおりに、わたしの質問はカケルに黙殺された。いつも通りで、なにも驚くようなことではない。

それよりも、なにを考えているのか無言で噴水の方に眼をやり、陽光にきらめきながら落下する無数の水滴を凝視している隣の青年に、その存在感に、わたしは自然と満たされるものを感じていた。無関係な他人とは思われないほどに近けれど、肩をよせあう恋人よりは少し離れた感じでベンチにならび、わたしたちは長いこと、黙りこんで公園の噴水をながめ続けた。

カケルが姿を消したのは二月の末、わたしたちの第三の事件であるアンドロギュヌス事件から、二カ月ほど後のことだった。市内速達で手紙がとどき、それには無味乾燥な事務的な文章で、しばらく日本語の個人教授はで